近現代詩

教材のねらい

1 選定の理由

室生犀星の「小景異情」の特に「その二」は、伝統的な七音、五音の音数律を生かし、「ふるさと」を詠んだ詩として人々に愛唱され親しまれてきた。萩原朔太郎「およぐひと」は、ひらがな表記の視覚的効果を加味した口語自由詩であり、主題の伝達ではなくイメージの表出を狙いとする。宮沢賢治の「永訣の朝」は、妹の臨終にあたり深い悲しみから生み出された祈りの言葉が、方言のリフレインを交えて、口語によるリズムを生み出している。茨木のり子の「汲む」は、目立って技巧的ではないが、奥深い思索を平易に言い表し、人生に対する洞察を印象的に伝えている。文体や技法のあり方はそれぞれ異なっているが、近代詩、現代詩の多角的な世界の一端をこれらの詩から捉えることができる。

2 指導のねらい

(1)詩の朗読により、リズムとイメージを喚起させ、味わう。
(2)それぞれの詩について、詩の言葉の持つ個性豊かな表現を味わう。
(3)内容・構成・表現・主題・動機について理解させ、根拠ある鑑賞のしかたを身につけさせる。
(4)時代的な表現と、時代を超えて伝わってくる抒情を味わう。

３　評価規準

学習指導要領との対応	〔知・技〕					〔思・判・表〕			
	(1)ア	(1)ウ	(2)ア	(2)エ	(2)カ	B(1)ア	B(1)イ	B(1)ウ	B(1)エ
評価規準例	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	我が国の言語文化の特質について理解している。 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。	時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めている。	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。	「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。	「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。 「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。
小景異情	○	○	○			○	○	○	○
およぐひと	○	○	○			○	○	○	○
永訣の朝	○	○	○	○		○	○	○	
【参考】人生の〈救い〉としての詩	○	○	○		○				
汲む	○	○	○	○		○	○	○	○

	B(1)オ	〔主体的に学習に取り組む態度〕
「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。		
進んで作品を、反復表現の効果に留意しながら読み味わい、学習課題に沿って、「ふるさと」と「みやこ」の関係について、作者の生きた時代なども参考にして考えようとしている。	○	
進んで、作品を比喩表現の効果に留意しながら読み味わい、学習課題に沿って、平仮名表記が作品にどのような効果をもたらしているか考えようとしている。		○
進んで、作品を、方言を取り入れたことの効果に留意しながら読み味わい、学習課題に沿って、作者の「いもうと」への思いと作品内の描写が、どのように関連しているかまとめようとしている。		○
進んで、作品を比喩表現の効果に留意しながら読み味わい、今までの学習を生かして、「大人になる」ことと「初々しさ」の関係について、作者の考えをまとめようとしている。	○	○